

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Haruki Miyazaki

1985年長崎県生まれ。中学卒業と同時に家族の転居により、五島列島の福江島に移住。高校卒業後、福岡在住の名工・大庭利男氏に師事。現在は福江島にある自らの工房で農具の製作や修理を行う。



## 野鍛冶(のかじ)

鍛冶は刀鍛冶、包丁鍛冶、鉄砲鍛冶というようにつくる品目によって分業化され、野鍛冶は主に農具を扱う。海に囲まれた五島列島の野鍛冶は、船の碇や牡蠣を割る牡蠣打ちなどもつくる。

# 野の鍛冶

宮崎 春生 氏

島の暮らしを支えるために、鉄を焼いては叩き続ける。

きっかけは？

宮崎「私の仕事は野鍛冶で、鉞くわや鎌かま、斧おのなどを扱っています。この世界を目指したきっかけは、大好きな島の人たちの暮らしを支えたいと思ったことでした。農作業に欠かせない道具づくり、手入れする鍛冶屋が、島からいなくなりつつあったんです」

かつて、日本の至る所で聞こえた音がある。「カンカンカン」と、鍛冶屋が鉄を叩く音だ。しばしも休まず鉞くわ打つ響きを鳴らし、さまざまな道具をつくり上げた鍛冶屋たち。しかし機械化の波に飲まれるように、昔ながらの職人技は一つ、また一つと消えていった。

宮崎春生さんは、長崎県・五島列島の福江島で鍛冶の伝統を守る若き職人。中学卒業後にこの島に移り住み、高校2年のころに鍛冶屋という職業に興味を持ち始めた。

高校卒業後、「弟子は取らない」という匠に3度の直談判の末、弟子入り。その下で5年間修業を積んだ後、念願だった自分の工房を福江島に構えた。

それ以来、宮崎さんは昔ながらのやり方で野鍛冶に挑み続けた。例えば斧づくり。斧の命である刃先には、特に労力を注ぐ。鉞くわを何度も振り下ろしてY字状に切り裂いた地金に、刃となる鋼を挟み込み、真っ赤に焼く。そして「鉄は熱いうちに打て」の教え通り、間髪を置かず鉞打くわうちを繰り返す。柔らかい地金と硬い鋼を接着する。それを火床ひとこで焼いては鉞くわで叩き、扇のよな形を整えていく。一瞬たりとも手と気を抜かないことで、機械による大量生産ではつくり得ない切れ味を持ち、かつ欠けにくい刃先に育てるのだ。

クライマックスは焼入れ。焼け具合の色で見極めるため、作業は日が落ちてから行う。炎を吐き出す火床と向き合い、ここぞという瞬間に抜き取っ

た鉄の塊を菜種油と水で冷やす。そして緩やかに熱を加えて焼戻し、磨きを掛けると鋼の刃先がまぶしい斧の出上がりだ。

夢は？

宮崎「野鍛冶という日本独自の文化を誇りに思い、その魅力を田舎の福江島から広く世界に発信する。いつか、そんな夢を実現したいですね」

島の人たちの力になりたいという、思いで飛び込んだ野鍛冶の世界。これからも青春時代を過ごした島で、若き職人はさらなる高みを目指す。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2012年1月取材。掲載内容は取材当時のものです。

**MOVIE MORE!!**  
炎と向き合い、鉄に全力で挑む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

**MOVIE**  
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

**Web版**  
パソコンやタブレットでご覧になれます。  
アットホーム明日への扉

**TV番組**  
ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組  
「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00

**ビジョン**  
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

**NEW!!**  
最新号のご案内

No.057 / 東京手描友禅職人 五月女 綾氏